

(・・・・・・は中略部分。[]は補足部分。赤・青太字は引用者によります。)

序章 三輪山幻想

三輪山と纏向遺跡

奈良盆地のほぼ中央部東側にあつて秀麗な姿を見せる三輪山、その三輪山の西麓、纏向まきむく(奈良県桜井市)一帯は・・・・・・「纏向遺跡」と呼ばれてきた。・・・・・・箸墓はしはか古墳も近くにあり、最初の本格的な前方後円墳とされるこの箸墓古墳こそ三世紀半ばに没した卑弥呼の墓とする見方も古くからあつた。・・・・・・纏向遺跡は邪馬台国畿内説の最有力候補地として急浮上し、昨今はここに決定したかの如き言説も目立つようになった。しかしその一方で、纏向遺跡を邪馬台国以後の遺構とみる意見も根強く存在しており、無視できないものがある。その後纏向遺跡では同じ場所から四世紀の建造物の遺構が出土したとも報じられており、それまでの遺構との関連が気になる。同所が邪馬台国の宮処であつたか否かは別として、**邪馬台国があとの大和朝廷と直接繋がるのか、それとも断絶するのか**、という問題も、倭国論の重要な課題だからである・・・・・・。

古い信仰・祭祀のかたち

三輪山の麓にある大神おおみわ神社は大物主神(大己貴神、大国主神と同神)を祭神とする・・・・・・。

二つの「国作り」物語

大神神社が注目されるのは、・・・・・・祭神の大物主神が出雲の神であり、その由緒に出雲神話の核心がこめられているからである・・・・・・。

なぜ出雲勢力進出を記述したのか

・・・・・・三輪山の神が出雲の大国主神と同神である・・・・・・。『古事記』『日本書紀』の編纂は、天武天皇の時代に加速した律令国家体制の形成過程において行なわれた一大国家事業であり、大和朝廷の歴史を後世に伝えるという重要な役割を担っていた。その書物に、**天皇勢力以前に出雲勢力が大和進出を果していた**事実を記述していることの意味を十分考えてみる必要がある。三輪山には、出雲の神が神話に彩られながらも、まぎれもなく歴史の実在として今日まで奉祭されてきたことを、あらためて確認しておきたいと思う。出雲勢力の存在とその事績について抜本的かつ謙虚な見直しと再評価が必要であり、その時期が来ていると考える。

第一章 出雲王国論

大物主神——三輪山の神

大国主神・・・・・・は・・・・・・大和の三輪山に祭られて大神神社の祭神とされ、大物主神の名で呼ばれることになる。三輪山の主となったことで名が変わつたのである。大国主神が大きな国の主であるなら、大物主神は万物の主、森羅万象を司る神のことであり、**大国主神を超える神**であつたといえるかもしれない。三輪山の信仰の根底には、古くからの神奈備信仰(引用者：かんなびしんこう 自然環境を神体しんたいとして信仰すること)や磐座信仰(引用者：神体の岩である磐座いわくらを信仰すること)といった自然信仰があつた。その三輪山へ人格神としての大己貴神が奉祭された時、なにが起つたかといえ、**人格神の方が自然信仰の世界に包摂され、変容した**のである。大物主神とは大己貴神＝大国主神が自然神的存在に变身

した姿のこととってよいであろう・・・・・・・・。

磐船神社——典型的な磐座祭祀・信仰

大和から河内（大阪府）へ抜ける磐船いわふね街道は、古来両国の間を結ぶ動脈であり、その名は、この道に沿って存在する磐船神社（交野市私市）に由来するが、ここにはより根源的な磐座祭祀＝信仰の姿が見られる。磐座は・・・・・・・・船首をあげて進む船の形と見て、これを『日本書紀』にいう、饒速日命が高天原から乗ってきて大和に降ったという「天磐船あまのいわふね」に擬して祭るようになったのである。その前面には、磐座に接して小祠（拝殿）が設けられている。あたりの雰囲気といい、ここには縄文・弥生の時代にまで遡りうる磐座祭祀＝信仰の姿を見ることができよう・・・・・・・・。

出雲との深い関わり

・・・・・・・・磐船神社の祭神は、当社の案内板には次のように記されている。

天照国照彦天火明奇王饒速日尊

・・・・・・・・丹後（京都府）籠この神社に伝えられてきたという「勘注系図かんちゅうけいず」・・・・・・・・〔は〕籠神社の「系図」に注釈を施したもので、系図とともに昭和五十一年（一九七六）国宝に指定され、学界で注目されている貴重な古代史料である。早速取り出して見たところ、その名があった。祭神、彦火明命の「亦の名」が種々あげられたなかに「天照国照彦天火明櫛王饒速日命」とある。「奇」を「櫛」、「尊」を「命」とする違いだけで、表記の趣旨は全く同じとみてよい。また他の個所にある「亦の名」の記載から、右（引用者：天照国照彦天火明奇王饒速日尊のこと）は、「天照国照彦天火明（命）」と「櫛王饒速日命」の二神の名を合体させたものであったこともわかる。この長い名は『先代旧事本紀』（巻三「天神本紀」、巻五「天孫本紀」）にも饒速日命の名としてのせられており、そこでは「天照国照彦天火明櫛王饒速日尊」とある。「奇・櫛」と「尊・命」の二字については三者三様であるが、とくに問題とすることはあるまい・・・・・・・・。

磐船神社（河内）と籠神社（丹後）

・・・・・・・・「勘注系図」によれば、彦火明命は「天磐船」に乗り丹後の国で空に上って河内国に降り、その後大和国鳥見白辻山に遷うって登美彦の妹、登美姫を娶り可美真手命（物部氏の祖先神）を生んだとする。『日本書紀』の記述と同様、籠神社でも天磐船伝承をもっていたことが知られるが、『日本書紀』では直接大和国に降ったのが、ここではいったん河内国に降ったことになっている。河内国というからには天磐石の降りた場所はこの磐船神社であるにちがいない。次に饒速日命については、『古事記』では神武東征の折、敵将登美毘古とみひこ（長髓彦ながすねひこ）の妹と結婚した天神であり、神宝を神武に献上して服属したとし、『日本書紀』では、天神の御子で、神武の大和入りより先に「天磐船」に乗って大和に降り、長髓彦を討ったあと神武に服属したとする。天磐船のことといい、結婚のことといい、その類似から、・・・・・・・・「彦火明命」と、記紀に記される「饒速日命」とは同一神とみてよいであろう。こうしてこの二神が合わされて磐船神社の祭神として記されたのである・・・・・・・・。

磐座祭祀＝信仰の背景——鉄生産

・・・・・・・・出雲系の神を祭る神社・・・・・・・・に磐座祭祀＝信仰があった・・・・・・・・。磐座・・・・・・・・を出雲系の神々の世界の徴証としたのは、その磐座信仰には独自の背景があったとみるからである。ひと言でいえば、磐座の発見は、出雲族に顕著な鉱山の開発、ことに鉄生産の仕事と深い関わりがある。工人たちが鉱脈の探索で山中を巡る間に出会った巨大な岩塊、奇怪な巨石に特別な思いを抱いたのにはじまったとみるのである。・・・・・・・・製鉄が「国作り」の中核を占めていたことから

すれば、出雲系の神と磐座祭祀＝信仰との関係は本質的なものだったといえるのである……。

第二章 邪馬台国の終焉

邪馬台国の「四宮」とは？

……『魏志倭人伝』の記述から邪馬台国には他の国とちがい、「官」が多数存在していた……。具体的には四宮である。すなわち、

邪馬台国に至る。(中略) 官に伊支馬あり、次を弥馬升といい、次を弥馬獲支といい、次を奴佳鞮という。

とある(「副」については記すところがない)。文中の「次」は、長官の下の次官といった上下関係を表わすものではなく、互いに同格、横並びの官のことを指しており、したがって伊支馬以下四宮があったことになる。つまり邪馬台国では国王(女王卑弥呼)の下に「官」が四つ設けられていたことを示している。この四宮をどのように理解すればよいのであろうか。まず「伊支馬」。よみはイコマに通ずるから、これは問題なく「生駒」、すなわち奈良盆地の北から西北にかけての地域の名と考えてよいであろう。とすれば他の三宮も同じように地域の名を表わしているにちがいない。その仮説を後押ししてくれる手がかりが、頭三文字に当てることのできる天皇名が確認されることである。すなわち、これまでの試みを参考にして、

- (1) 伊支馬 イコマとよむなら垂仁天皇が伊支米いぐめ入日子伊沙知命(磯城玉垣宮)
- (2) 弥馬升 ミマスとよむなら孝昭天皇が御真津みまつ日干詞恵支泥命(葛城掖上宮)
- (3) 弥馬獲支 ミマキとよむなら崇神天皇が御真木みまき入日子印恵命(磯城水垣宮)

天皇名が御陵の所在地

さてイコマにヒントを得て検討した天皇名の頭三文字が地域の名を指すと仮定すれば、それは宮殿の所在地か御陵の所在地が考えられる。宮殿の所在地とした場合、(1)と(3)がどちらも磯城とされているので重なってしまう。したがって地域の重なりのない御陵の地とするのが適切であろう。『古事記』によれば御陵の所在地は次のようである。

- (1) 垂仁天皇→菅原御立野みたちの(奈良市尼辻西町)
- (2) 孝昭天皇→掖上わきがみ博多山(御所市三室)
- (3) 崇神天皇→山辺道勾之岡やまのべのみちまがりのおか(天理市柳本町)

このように見てくると、それぞれは大まかに、

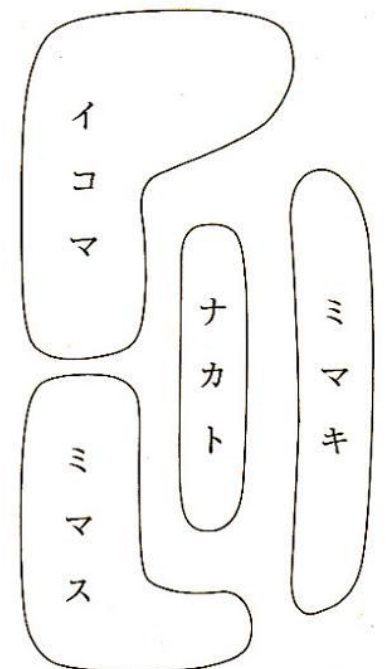
- (1) イコマ……生駒山を含む奈良西北部一帯
- (2) ミマス……奈良西南部の葛城一帯
- (3) ミマキ……奈良三輪山の麓、天理から桜井にかけて

という地域のことになる。

このように推理すると、(4) 奴佳鞮も地域を示していると考えられるが、思い当たる場所がない。しかしこれは「ナカト」とよめるから「中処なかと」、真中の場所、すなわち「中央部」のことではあるまいか。したがってこれだけは固有名辞ではなかったのだ。

以上を大まかな概念図で表わしたのが、右上の図である。

すなわち「ナカト」が「イコマ」(生駒)、「ミマス」(葛城) および「ミマキ」(三輪) に取り囲まれた形が描き出されるの



邪馬台国の四宮

である。もう一度整理すれば、**邪馬台国（大和国）は領域を四つに分け、「イコマ」「ミマス」「ミマキ」の三官で周囲の三方、というより事実上四周を固め、「ナカト」の官がそれらに囲まれた中央部を担っていた。**

それは奈良盆地中央部にあった

この事実から導き出される結論はただ一つ、邪馬台国の王室宮殿はこの「ナカト」の区域内にあった、と。まさしくそこは奈良盆地（大和盆地）の中央部であった。これまで述べてきたように、弥生時代の国々の中樞はどこも平野部の微高地に立地する環濠集落にあったと考えるが、邪馬台国の王宮も同様の条件のもと、奈良盆地の中央部にあり、それは現在の田原本町の町域内にあった、と断言してよいであろう。その境域はほとんどが市街地となっており発掘不可能な地域であるが、いつの日にか、以上の推論が考古学的に確認されることを願っている。邪馬台国の宮都、卑弥呼の王宮は奈良県田原本町の市街地の下に埋れている……………。

出雲系氏族連合による王朝

邪馬台国が領域を四つに分け、それぞれの「官」が管領していたと推測したが、このことの意味はそれにとどまるものではない。中央部はともかく、周囲の三区域には北に物部氏、西南に鴨氏、東に大神氏がそれぞれ幡鋸していたからである。三分は、かれら豪族の存在に対応するものであったという方が実態に近いといえよう。それが国家の組織が未熟な段階にふさわしい姿であったと考える。しかもさらに重要な点は、これら三氏族がいずれも出雲系の氏族であったことである。詳しくはあらためて取り上げるが、核心を述べれば、邪馬台国は出雲系の氏族連合によって擁立された王朝であったといつてよいのである……………。出雲系の神と人が卑弥呼の時代から大和の国内に満ち満ちていたのである……………。

非連続説をとる——記紀に卑弥呼が登場しない

……………この大和盆地のなかに、かつて邪馬台国の卑弥呼がおり、その後大和朝廷の王宮も営まれたわけである。そこで邪馬台国がのちに大和朝廷になったと思うのは、ごく自然な認識であろう。つまり邪馬台国を大和朝廷の初期段階の姿とみるのである。そこでこれを邪馬台国・大和朝廷連続説と呼ぶなら、邪馬台国畿内説を唱える論者の多くが連続説をとるのは不思議ではない。しかし、事はそう簡単ではない。場所は同じ大和でも、**邪馬台国と大和朝廷とは繋がらない**というケースもありうるのではないか。これを邪馬台国・大和朝廷非連続説と呼ぶなら、私はこの立場をとっている。そう考えるに至った根拠はただ一つ、邪馬台国や卑弥呼の名が『古事記』や『日本書紀』に一度として出てこないことにある。三世紀前半、使者を帯方郡、さらには洛陽にまで派遣して魏王から「親魏倭王」の称号を受け、銅鏡百枚ほか数々の品物を下賜された倭の女王が大和朝廷の祖先であれば、その人物を皇統譜に載せてしかるべきであるにもかかわらず、卑弥呼のヒの字も出てこない。卑弥呼は日本の神話歴史のなかでは完全に無視されているのである……………。

大和朝廷とは無縁の存在

……………卑弥呼の名は『日本書紀』に書き留められることはついになかった。ひとえにそれは卑弥呼が大和朝廷の祖先ではない、無縁の存在であると思われていたからであり、それ以外の理由は考えられない。卑弥呼は大和朝廷の皇統譜に載せられるべき人物ではなかったのである。卑弥呼の存在がかくの如くであったとすれば、同じく『日本書紀』に載せられることのなかった邪馬台国も、おのずから大和朝廷の前身ではなかったということになる。私か邪馬台国・大和朝廷非連続説をとるゆえんである。

卑弥呼の死

しかし連続か非連続かの違いを問わず、これまでの邪馬台国をめぐる議論のなかで明らかにされていないのは、その最後である。唯一の史料である『魏志倭人伝』がそこまで語ってくれていないからである……。『魏志倭人伝』は最終段階で邪馬台国をめぐる事態の急変を告げる……。そんな非常事態のなかで卑弥呼が没してしまう……。

邪馬台国の終焉と「神武東征」

私は、『魏志倭人伝』の記述が終る頃、つまり魏が滅亡する前後に邪馬台国も滅んだと考えている。『魏志倭人伝』の最後が年次を欠くのは、そうした中国社会の流動する事態のなかで逐一説明しきれなかった、というか、説明することを放棄した結果ではなからうか。**卑弥呼が没した頃、倭国の争乱に乗じてあらたな勢力が東に向けて移動しはじめ、やがて邪馬台国は激しい攻撃にさらされることになる。『魏志倭人伝』からは知ることのできない邪馬台国最後の状況は、じつは『日本書紀』が克明に記録していたのである——。それがいわゆる「神武東征」に他ならない。**

「神武東征説話」と向きあう

邪馬台国は、実際の政治は男王がとっていたであろうが、シャーマンとして卓越した能力をもつ卑弥呼がいることで成り立つ女王国だった。その主を失った邪馬台国——正確に言えば邪馬台国連合——の結束が動揺したであろうことは想像に難くない。そればかりか卑弥呼の死の前後から、『魏志倭人伝』が語るように、狗奴国をはじめとする諸勢力が邪馬台国打倒の動きを見せはじめていた。その最大の勢力こそ、おそらく九州地方で力を結集し機会をうかがっていた、記紀にいうところの神武勢力であった。卑弥呼の死を聞くや直ちに本拠地に向けて侵攻を開始したとみる。私は本書を成すに当って、この「神武東征説話」と真正面から向きあいたいと思っている。第二次世界大戦後に歴史研究に入った者にとって、神武東征説話を取り上げることは極めて強いプレッシャーを受ける仕事である。神話伝承を歴史として教えた戦前戦中の歴史教育への厳しい批判を知っているからである。なかでも神武東征はフィクションの最たるものであって歴史ではないとされ、これを取り上げることは歴史研究や歴史教育を逆行させるものだと非難されたのだった。そのことを百も承知で神武東征説話を取り上げる理由は二つある。一つは、邪馬台国は大和朝廷につながらない、両者の間は断絶している、とみる立場からすれば、外部から入った勢力が大和朝廷を立てたとみるべきである。そこで浮上するのが『古事記』や『日本書紀』に記す神武勢力であり、ことにその大和侵攻の状況を明らかにする必要があること。二つは、その神武勢力の大和侵攻の状況が、別の個所で明らかにした邪馬台国の「四官」体制に対応しており、神武の大和侵攻が決して絵空事ではなかったと判断されることである。神武東征説話は十分検討に値するテーマなのである。ここでは神武軍と大和勢の攻防を、やや詳しく述べ、邪馬台国が滅亡する最後の姿を見届けることに努めたい。

生駒の戦い

さて記紀の記述によれば、九州高千穂宮から出立した集団は宇沙うさ・筑紫をへて安芸・吉備と瀬戸内海を東に進み、浪速の渡（大阪府中央区上町台地辺り）をへて、白肩津しらかたのつより大和をめざしたが、待ち構えていた登美能那賀須泥毘古とみのながすねひこ（長髓彦）と日下くさかの蓼津たでつで激戦を交え、敗退する。神武の兄、五瀬命いせつのみことが矢を受け深傷を負ったのはこの時であるが、『日本書紀』はこの戦いの有様を次のように記している。

河（現在の寝屋川）を遡り、河内国の日下（東大阪市日下町辺り）から上陸、竜田越えをしようと試みたが、路は狭く険しいため引き返し、東方の生駒山を越えて国のなかに進入しようとしたところ、長髓彦の軍勢と孔舎衛坂くさへのさか（現近鉄奈良線生駒トンネル西出口山麓）で激戦となった——。

日下は古くは日下江くさかえと呼ばれた広大な入江であった。神武勢はこの入江から上陸を試みたが、生駒山を越え入江で待ち受けていた長髓彦の軍勢と激戦になったというのである。孔舎衛坂には現在、石切剣箭いしきりつぎや神社があり、物部氏の祖、饒速日命にぎはやひのみことが祭られている。第一章でも述べたが、饒速日命とは天磐船に乗って河内に下り大和に入ったという物部氏の祖神で、長髓彦の妹と結婚したとする。長髓彦はこの饒速日命に仕えた豪族であった。この生駒の戦いが注目されるのは、長髓彦が神武の侵攻を予め察知して待ち構えていたことである。邪馬台国としては神武軍の侵攻を生駒でくいとめることが最初で最大の課題だったからである。それが長髓彦の働きによって成功した。この勝利が以後の戦いを有利に導いたことはいうまでもない。

熊野に再上陸

神武軍は生駒山から金剛山へと続く山なみに行く手を阻まれ、南下して紀伊半島を迂回し、ようやく陸に上がることができたのは熊野（和歌山県新宮市辺り）においてである。しかもその途次、傷を負っていた五瀬命が紀国の男之水門をのみなと（和歌山市和田）で亡くなっている。本来ならこの和田から紀の川を遡り、大和へ入るのが考えられる道筋であるが、神武軍はそれをせず熊野まで迂回しているわけである。その理由は、紀の川で大和へ入るには葛城の勢力を討たねばならなかったからである。葛城には、出雲の神、阿遲須根高彦根命あじすきたかひこねのみことを祭る高鴨たかかも神社があるように、一帯に鴨氏勢力が幡鋸していたのである。神武軍は熊野に上陸してからも苦戦を強いられている。記紀ともに、熊野に入っただけで一行は神の毒によって気を失ったとする。しかし天から下された神剣、布都乃魂ふつのみたま（現石上いそのかみ神宮に祭られる）によって助けられ、吉野から菟田うだ（現宇陀市菟田野宇賀志辺り）へと進む。菟田では兄宇迦斯えうかし・弟宇迦斯おとうかし兄弟のうち兄が神武を討とうと企み、弟がそれを密告、八咫鳥やたがらすの登場もあつて勝ち戦を進めた話をのせる。

記・紀の記述のちがいを

留意されるのは、この菟田（宇陀）の地以後、神武軍が大和盆地へ入るまでの戦いの記述が、記・紀で大きな違いをみせることである。すなわち『古事記』では忍坂おしさかの土雲つちぐもや登美毘古とみひこ、兄師木えしき・弟師木おとしきの名と久米歌をあげるだけで急転直下、饒速日命の服属と神武の平定事業の成就を簡単に述べ、橿原宮での治政実現で終る。これに対して『日本書紀』は、この間における神武軍の動きと、神武軍の侵攻を阻もうとする大和側諸勢力との攻防の様子を詳細に記述しており、関心の置き所の違いがよくわかる。なかでも注目されるのは、神武軍の侵攻を防ぐために張ったという大和側の布陣の場所についてである。

すなわち菟田に留まっている神武軍を阻むために、

- ① 女坂めさか（小峠を越え栗原・忍坂から桜井へ抜ける）
- ② 男坂おさか（小峠を越え多武峰とうのみねへ抜ける）
- ③ 墨坂すみさか（宇陀市榛原西峠で大和と伊勢を結ぶ要所）

の三つの要所に軍兵を配置し、宇陀から大和へ入る峠道のすべてを封鎖した上、さらに峠を越された時に備えて、

- ④ 磐余いわれ（桜井～橿原市東端）
- ⑤ 磯城いしき（桜井市の三輪山麓）

に軍兵を配置、その上、多武峰から飛鳥方面へ侵攻された場合を考えてか、

- ⑥ 高尾張たかおわり（御所市西南部葛城地方）

にまで軍兵を配置している。

神武軍の大和盆地への侵入を阻止するために、大和の東部から西南部にかけて、城壁を連ねたように布陣していた様子がよくわかる。しかも大和側の布陣は、のちにあらためて取り上げるが、「出雲国造神賀詞かむよごと」に登場する「皇孫の命の近き守神」の場所——三輪山・鴨・栢森かやのもり——と重なっていたことにも注目したい。いずれも出雲系の神々であったからで、神武軍の侵攻を阻んだ軍勢がまぎれもなく出雲勢力であったことを物語っている。卑弥呼亡き後の邪馬台国連合は、王国を守るために総力を結集していたのである。だが神武軍は墨坂を越え、磯城を撃ち破り、ついに大和に入ってきた。

長髓彦の死と大和朝廷の成立

ところが神武軍は、そこで長髓彦にてこずっている。何度戦っても勝てない。長髓彦は孔舎衛坂での防禦に成功したあと、大和盆地を斜めに横切って桜井方面に移動し、再び神武軍と相見えていたのである。そんな時、**金色の瓊とびが飛来し、長髓彦の軍兵たちの氣力を失わせてしまう**。そこで長髓彦は神武に使者を遣わしていう。「昔、天磐船に乗って天降った櫛玉饒速日命が、私の妹の三炊屋媛（鳥見屋媛とみやひめ・登美夜毘免とみやひめ）と結婚し可美真手命うましまでのみことを生んだ。私は饒速日命を君と崇めてお仕えしているから、私にとって天神の御子が二人もいるはずがない。なぜ人の国を奪おうとされるのか」と。その後長髓彦は神武が天神であることを知ったが、戦いを止めようとはしなかった。そこで饒速日命の方が、いまや危険な存在となった長髓彦を殺し、軍兵を率いて神武に帰順する。『古事記』は饒速日命がその際「天津瑞あまつしるし」を差し出したとするが、これについては「国譲り」に関連してあらためてふれたい。戦いに勝った神武は大和入りを果たし、橿原の地に宮殿を営み、即位する。いわゆる大和朝廷の成立である。

長髓彦とは何者か

ところで神武の大和侵攻に当り、最初と最後の戦いに登場する長髓彦とは何者か。『古事記』に登美能那賀須泥毘古・登美毘古とあるように、現在の奈良市富雄地域に幡鋸した豪族であったとみられる。富雄地区は、現大阪府交野市から奈良県へ入る磐船街道が通り、西は生駒山で東大阪市と分けられる。したがって生駒山を越えれば先廻りして孔舎衛坂で神武軍を待ち受けるのはたやすいことだった。先にもふれたように、その孔舎衛坂には石切剣箭神社があり、長髓彦が主人と仕えた饒速日命とその子、可美真手命を祭神とする。また背後の生駒山中には上ノ宮があり、それが当社の元宮もとみやであると伝える。**生駒山に饒速日命が祭られるのはもっぱら長髓彦との関係による**ものであろう。

長髓彦の伝承を求めて

一日私は長髓彦の伝承を求めて石切から富雄へ廻り、富雄川に沿って歩いてみた。富雄川は奈良県の北部、生駒市高山町に源流し、南へ奈良市・大和郡山市・斑鳩町をへて安堵町で大和川に合流するが、流域には長髓彦の遺蹟が点在しているからである。とくに伊弉諾いざなぎ神社（生駒市上町、長弓寺内旧牛頭天王社）、添御県坐そうのみあがたにいます神社（奈良市三碓）および登弥とみ神社（奈良市石木町）はそれぞれ上鳥見かみとみ・中なか鳥見・下しも鳥見の鎮守とされ、富雄川流域の住民と深いつながりをもってきた。なかでも富雄地域の中心であったとみられる添御県坐神社は、社殿の裏山が円墳を思わせる雰囲気があり、由緒の古さが感じられたが、そこで聞いた伝承も印象に残っている。当社の祭神の一座、武乳速命たけちはやのみことは、『新撰姓氏録』に、「大和国神別の添御県主は津速魂命つはやたまのみことの男、武乳速命より出る」とあり、社伝も、武乳速度命を添御県一帯の首長の祖先神としている。地域の人たちはこの武乳速命が長髓彦のことと信じ、神武東征の折の孔舎衛坂の戦いでは、自分たちの先祖は長髓彦に従い、生駒山頂から大きな石を神武の軍具に向けて投げたものだ、と、戦いのさ

まを昨日のこのように語ってくれる古老がいたとのことだった。**先祖が長髓彦に従って戦ったという伝承を信じ、それを誇りにしている人たちが現代もいる**というのである。これを荒唐無稽の話として退けるのはたやすいが、庶民の記憶を傷ることなかれ。その深層を探ることが歴史を理解する上でいかに大切なことではなかろうか。

反逆者の烙印

なぜ長髓彦についてそう思うのか。それは神武の軍兵と戦ったことが不敬不遜の行為とされ、その名をもちだすことがタブーとされてきたからである。古老の言によれば、当社の祭神から長髓彦の名が消えたのは明治になってからであるという。近代国家になった時期に消された、この種の神や人が少なくなかったことを記憶に留めておきたい。一介の“土賊”がひとたび反逆者の烙印を押されてしまうと、歴史はかくも非情無残だったのである。**長髓彦は生駒地域の首長だっただけでなく、饒速日命の率いる邪馬台国連合の総大将であった**とみられる。神武軍の侵攻をまず生駒でくいとめた上、桜井への侵入にも立ち向かい、最後の戦いの指揮をとったのも、同じ理由による。なお、『日本書紀』の注釈書の多くは、桜井の戦いの際に現われた鵄とびが詠って「鳥見とみ」とされたという地名について、**長髓彦の本拠である「富雄」**に当てているが、それは正しい理解ではあるまい。もしそうであれば、墨坂を越えて磯城に入った神武軍は、奈良盆地を北西にいきなり生駒にまで進んだことになるが、それは不可能というものである。神武と長髓彦の最後の戦いの場は、現近鉄桜井駅に近い、その名も「外山とび」地区（桜井市）辺りであったとすべきである。さすれば大和に入った神武がこの外山に近い橿原に宮を設け、この辺りを磐余いわれ（軍兵が集って満ちあふれる地）としたのも納得がいく…………。

豪族・土豪の抵抗

こうして邪馬台国は終焉を迎えたのである。しかし『日本書紀』は、長髓彦との戦いに続けて、盆地内の四か所の帰順しない賊（①～④）を退治する話をのせるが、ここでも注目すべき事実が知られる。

① 層富県そほのあがたの岐口たはの丘岬おかざきの新城戸畔にいきとべ

大和国添県そうのあがた。現奈良市から大和郡山市の新木町にかけての地域。前述した添御県坐神社なども含まれる。富雄川流域の全域と考えてよいであろう。

② 高尾張邑の土蜘蛛つちぐも

葛城地方。現御所市西南部であろう。

③ 和珥わにの坂下の居勢祝こせのはふり

天理市和爾地域である。

④ 臍見ほそみの長柄ながらの猪祝いのほふり

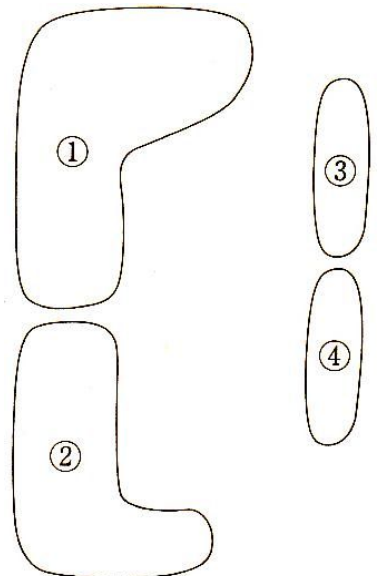
天理市長柄であろう。

神武が大和に入り、戦いが終わったあとでも、実際には多くの“残党”の抵抗を受けたことが知られる話であるが、右の①～④の場所が、邪馬台国の「四官」のうち「奴佳鞮

なかと」（中央部）を囲む三官<①～③>すなわち、

①層富県→(1)伊支馬＝生駒（奈良県西北部）

②高尾張邑→(2)弥馬升＝御所市（葛城地方）



③和珥和綴・④躰見→(3)弥馬獲支=天理市（天理から桜井にかけて）

というふうにそのまま重なり合っているのである。これは邪馬台国の四官（のうち中央を除く三官）体制を支えていた豪族・土豪たちが神武の大和侵攻に激しく抵抗したこと——外から入ってくる時も、入られた後も——を物語っている。神武の大和侵攻は史実を反映していると確信した、これが最後で最大の理由である。

第三章 大和王権の確立

饒速日命の帰順は「国譲り」

邪馬台国は外部勢力（神武軍）の侵攻を受けて滅亡したが、しかし戦闘に敗れた結果ではない。総帥・饒速日命が最後の段階で、戦わずして帰順したからである。 饒速日命は、もっとも信頼のおける部下の長髓彦を殺してまでも和平の道を選んだのである。饒速日命の決断は正しかったのかどうか、その行為の意味を検討してみる必要がある。ここでもう一度、神武の大和進入時の状況を見ておきたいと思う。苦勞の末、大和入りを果たした神武軍だが、生駒から桜井方面に回った長髓彦との戦いにどうしても勝てなかった。神武側が圧倒的に優勢というわけではなかったし、長髓彦側にも勝機はあったということだ。しかし饒速日命は、戦さにはやる長髓彦を殺した上帰順した。一説に殺したのは子の可美真手命とするが、いずれにせよ主戦論を抑えて無血開城に踏みきったのである。この時饒速日命が何を考えていたか、記紀は何も語ってはくれないのだが、このように見えてくると、**饒速日命の帰順は「国譲り」といってよい**のではないか。これがもし全面対決の末に敗れたのであれば、降伏あるのみで国譲りにはならない。国譲りは譲る側も余力を残してはじめて実現するものであったと考える。その意味で饒速日命の行為=帰順は、一定の権益を保持する上で最上の選択であったといえよう。こうして邪馬台国は矜持を保ちつつ滅亡したのである。栄光のなかの亡びであった。

「国譲り」の役割と意義

むろん記紀にいう「国譲り」とは、葦原中国あしはらのなかつくに（=地上世界）を作り治めていた大国主神が、天照大神の命に従い、その統治権を天孫に譲るというものであった。しかしその際、大国主神が葦原中国を天津日継あまつひつぎ（天皇家）に献上すると引き替えに、天皇の宮殿のような立派な宮の造営を要求したことは知られる通りである。これも国譲りであったからこそ得られた成果であったろう。そしてこの約束が負い目となって、のちのち出雲大社の造営が大和朝廷の重荷となる。**饒速日命の帰順（国譲り）は大国主神の国譲りと相似し、その原像であった**といえるであろう。そして神話の世界ではこの国譲りが実現したことで、天津彦彦火瓊々杵尊（以後瓊々杵尊を用いる）が葦原中国に天降る、いわゆる「天孫降臨」の話へと続くわけである。「国譲り」は「天孫降臨」の前提であり、それあって天孫降臨はありえたのである。しかしこの天孫降臨の話で不可解なのは、葦原中国の統治権を得た天孫の降臨先が、なぜ大和ではなく、九州日向の高千穂の峯（鹿児島県霧島、又は宮崎県高千穂峡とする）であったのか、である。地上全土を譲られたのであれば一挙に本拠地の大和に降ってしかるべきではないか。ところがそうはしなかった。そればかりか、後年、大和へ入るために東征という大事業を起こさねばならなかった。これでは何のための国譲りであったのかと疑いたくなる。思うにそれは、もともと天孫とされる神武の勢力が、おそらく南九州あたりに本拠をもつ豪族だったからで、そこからしか邪馬台国連合の中心地である大和へ侵攻することができなかったのである。ただし、もし**神武が邪馬台国側に圧勝していたら、国譲りはもとより東征も語られることはなかったろう**。そうした敵対者なくして朝廷を樹立することがもっとも望ましい姿であったはずだからである。そのように考えると、饒速日命の決断=国譲りがどちらの側にとってもその後の行動の前提となったといえてよく、その果した役割と

意義の大きさが理解されよう。

・・・・・・(以下、略)。